

だんぷさんこふん
断夫山古墳(本発掘調査B)

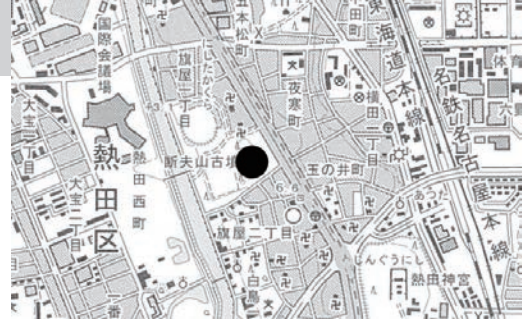
所在地 名古屋市熱田区旗屋町一丁目
 (北緯35度07分52秒 東経136度54分14秒)

調査理由 史跡断夫山古墳整備事業

調査期間 令和2年11月～令和3年1月

調査面積 90㎡

担当者 池本正明・武部真木



調査地点(1/2.5万「名古屋南部」)

調査の経過 愛知県と名古屋市が共同主体となる史跡調査事業に関連する学術調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて行った。調査は、史跡として指定されていない周濠・周堤を調査し、古墳の正確な範囲を確認するための基礎的な情報を得ることを目的とし、今年度は墳丘東側の熱田神宮公園内に90㎡の面積が設定された。

立地と環境 断夫山古墳は名古屋城付近を北端として南へ舌状にのびる洪積台地(熱田台地)の南端西縁辺(標高約6m)に立地する。北から北東側にかけては高蔵遺跡、高蔵古墳群、東側に玉ノ井遺跡、南側には6世紀初頭の築造とされる白鳥古墳など弥生～古墳時代の遺跡が濃密に分布し、南東側には熱田神宮が位置する。加えて地籍図の記載を元にするると、調査区付近は昭和17年に移転した観聴寺(浄土宗)の敷地であったと考えられる。



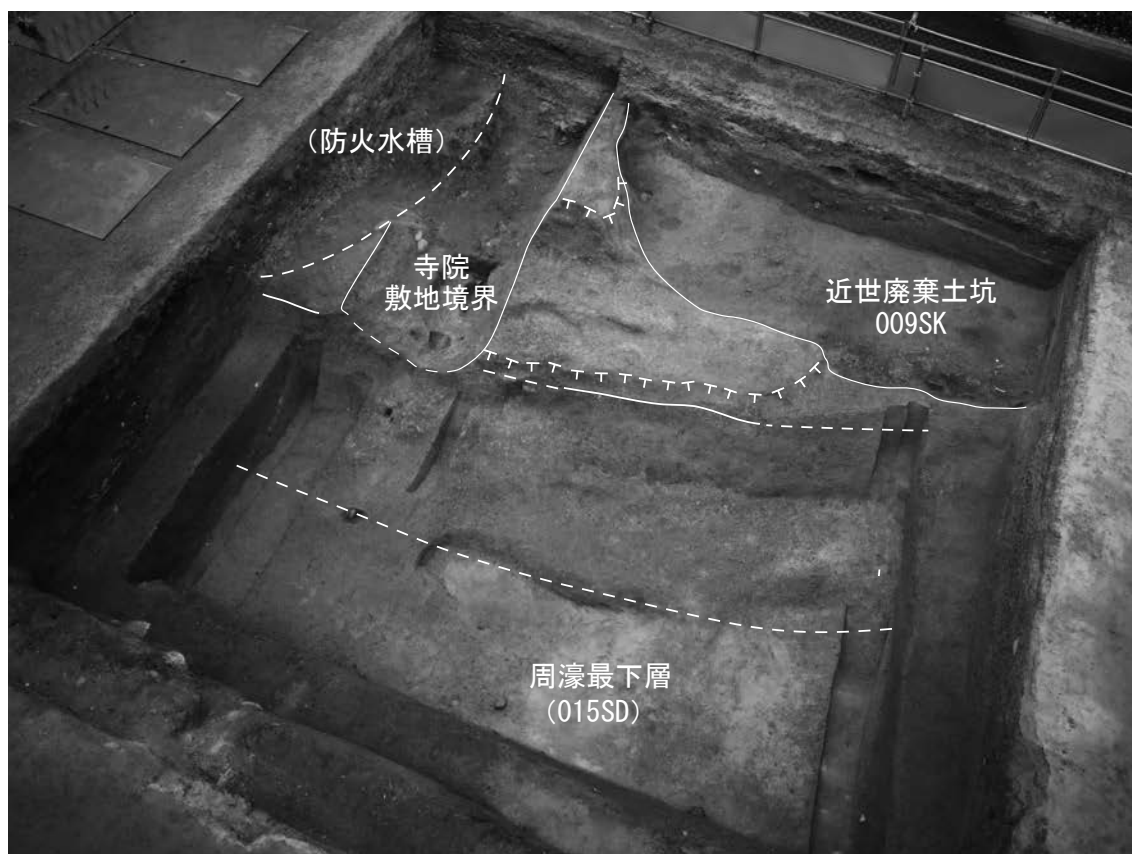
断夫山古墳の史跡範囲と調査地点(S=1/1500)

調査の概要 今回の調査により確認された主な遺構は、近代の整地層と建物礎石、寺院敷地境界に関わる溝・護岸石垣、建物礎石、近世（19世紀第2四半期）の陶磁器類や瓦を含む大型の廃棄土坑（009SK）、そして断夫山古墳の周濠（015SD）の東側立ち上がり部分（外側斜面）である。

ここでは周濠について記載する。古墳周濠は熱田台地を掘りくぼめて造られており、今回の調査範囲内では最深部で標高3.5m、削平を免れた調査区東端付近で基盤層の標高は5.8mあり、比高差は2.3mとなる。南壁断面では後世の改変が標高4.0mの深さまで及んでいることが確認でき、この掘削部分の最下部は水平に東側の熱田層をも削り込みテラス部分を形成している。その下から墳丘に向かって傾斜する堆積層（015SD）より須恵質・土師質の埴輪片、土錘（1点）、長径15cm前後の円礫が出土した。

周濠上部は削平が著しく、斜面形状や周堤の有無は今回の範囲内では確認できない。また、基盤層で確認できる周濠の立ち上がり部分は、直立に近い急角度となっている。この部分を埋めるかのようにブロック状の粘土・土を含む硬く締まった堆積層があり、北壁断面では斜面を形成し埴輪片を含む埋土がその上に堆積していることが確認できる。外側斜面下端のこの堆積層には摩滅した土器小片が混じり、条痕文土器、廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式期高坏などが認められるが、埴輪片は含まれない。これまでのところ、底面付近は周濠本来の形状を残していると思われる。

ま と め 今回の調査により断夫山古墳の周濠の存在が初めて明らかとなり、その規模は深さ2.3m以上となることが確認された。調査区が設定された墳丘東側は古くからの主要街道に面する場所であり、特に上部は大きく影響を受けている。古墳周濠・周堤の詳細な形状の判断にはさらに慎重な検討が必要である。
(武部真木)



調査区全景（南西方向から撮影）